

## 報告

## 私たちはコロナに負けない： コロナ禍で留学機会を逸した若者が切り開く未来 (教育連携部会未来会議報告)

奥山則和<sup>A</sup>

2020年7月31日(金)の14時から17時45分まで、Zoom<sup>1)</sup>というアプリを用い、Web会議という形で標題の企画が開催された。

6月27日に開催された本部会の緊急会議では、国際連携職にある教員と旅行代理店の会議はできた。しかしグローバル教育のステークホルダーの一つ生徒・学生は参加しなかった。彼ら・彼女らに発言する機会を提供したいというのが、この会議を開催する意義である。若者への発信機会の提供は本部会の伝統でもある。

会議の開催は、簡単にはいかなかった。8月に入ると校舎を閉鎖してしまう学校がある一方、7月末に講義や期末テストを実施している学校もあり、参加者を集めるのに苦労した。関係者の尽力により結果的には、地域性や留学の目的などで、多様な発言者が参加して下さることになった。発言者の概要は以下の通り。

秋元達也さん(玉川大学文学部2年生)

イギリスへ9月発9ヶ月留学の予定が1月発に  
岡本壮平さん(玉川大学文学部2年生)

イギリスへ9月発9ヶ月留学の予定が1月発に  
山本真由さん(玉川大学経営学部2年生)

就職活動を見据えアメリカ1年留学を断念  
中村美月さん(名城大学外国語学部2年生)

カンボジアでボランティア予定だった  
森永美雅さん(桐蔭学園高等学校2年生)

セブ島での語学研修がキャンセルに  
柳蒼太さん(高槻高等学校2年生)

台湾での研究発表が中止に  
布こころさん(愛媛大学附属高等学校3年生)

マルタでインターンシップ研修予定だった  
市川凌さん(喜界島・自宅待機中)

セブ島語学研修後にカナダへ留学の予定だった

会議の流れとしては、まずは左の発言者が主に英語で、1分を目処に自身の状況を紹介した。次にブレイクアウトセッションを15分実施し、生徒・学生だけで話し合う時間を設けた。その間、参加者の教員は教員で同セッションを行い、情報交換の場にしていただいた。

総合司会は、教育連携部会副部会長の高城宏行氏に担っていただいたが、ブレイクアウトセッションでの司会及びその内容の全体へのフィードバックは学生にお願いした。両名とも、連続して本学会へ参加している、学生である。

小野寺陸さん(成蹊大学経済学部2年生)

大口真史さん(名城大学外国語学部3年生)

2人の報告は、興味深いものであった。共通しているのは、発言者の高校生・大学生の意識が高く、留学目的や将来になりたい像がはっきりしていたことである。また、コロナ禍で留学がダメになったからそこで全てを諦めるわけではなく、自分がいる環境でできる限りの工夫をして学びを止めていないことも印象的であった。自らZoomで外国人と英会話練習をしているという者もいた。

新型コロナウイルスの影響が落ち着いたら海外へ行きたいという生徒・学生は多かったものの、就職してしまった後に長期留学を考えるのは難しいようであった。また、英会話程度ならばオンラインサービスでなんとか学習は継続できるものの、専門性の高い学修ができているとは言えないのも事実のようである。

発言者に対する参加者からの質問は、似た質問が2つあった。1つは、こういう事態でどのようなサポートを望むか。もう1つは、機会喪失に替わるものとしてどのようなサービスを望むか、というものであった。発言者から上がった声は、次の通り。

・コロナ禍を受けて休学して長期留学しようとして

A: 桐蔭学園グローバル教育センター  
グローバル人材育成教育学会・教育連携部会長

いたが、大学院に進学して留学しようと思うようになった。しかし、情報は足りない。

- ・オンラインもいいが、その場を共有するようなことができないと不満が出てくるのでは。
- ・海外進学を諦めた。国内進学に気持ちは切り替えたものの、進学後の海外研修の機会に関する情報が無いのが不安。国際公務員になるためにも、海外の人と一緒に過ごす機会は欲しい。
- ・オンライン授業で課題が増えて疲弊し、自分のために学ぶ時間が取れなくなった。
- ・取り敢えず海外に行ってみようという学生へも、目的意識が高く専門的な学修のために留学したい学生へも、レベルにあったサポートが必要。
- ・学内のサービスを有効活用したり、日常生活の中でできる英語学習を心がけたりしている。
- ・就職して活躍することが大事であり、目的のない留学は無意味。将来必要な資格の取得に関心が移った。
- ・留学に近い機会を創出して欲しい。オンラインでの交流機会・疑似体験は、役に立っている。
- ・少人数のディスカッションは、シャイな人でも発言ができるのでいいのでは。
- ・高校生は空いている時間が少ない。夏休み直前にこのような機会があり、刺激になった。

一方、発言者である高校生・大学生からは、喜界島の市川さんからこのような交流を今後も持って欲しいという要望があった。島内の限られた交流機会<sup>②</sup>を大いに活かしてきた彼らしい発言である。

以上のやり取りから、学会常任理事のアーナンダ＝クマラ氏より、提案があった。英語を学ぶだけに海外に行くのはもったいない。ただ、海外に出る意義も大きい。現在、大学では PBL (Problem Based Learning) のスタイルが増えているが、こういう時こそ高校生・大学生が PBL として自分たちでできることを模索してもいいのではというものだ。例えば、日本にいる多国籍の方々とホームビジットなどをしてみてはどうか。このような状況で日本社会に入っていけないと感じる外国人も多く、このような交流は歓迎されるのではないかと。マッチメイクはお手伝いしたいと。

高城氏からは、簡単にできるオンライン交流の実践例、特に SNS<sup>③</sup>を駆使したものが紹介された。一過性であっても、今はどのコミュニティーも交流に飢えているので、オンラインでもできることがあるというこ

とだった。

高校生の柳さんからは、オンラインの世界の広がりから英語教育がどのように変化していくのか、という質問があり、内田富男氏と奥山が回答した。奥山はまず、言語能力の天井を上げるという意味での読解能力と、言いたいことが出力できる回路という意味での発信力とは、学校の英語教育で伸ばせるものという説明をした。しかし同時に、それだけでコミュニケーション能力全般が伸びるわけでないことを伝えた。

それを受けて内田氏は、クマラ氏の日本語運用能力を例に、高い文化理解がスムーズなコミュニケーションを可能にしていること、そしてそれは学校の英語教育では十分に身につかないことを伝えた。

最後に高城氏とクマラ氏が、全発言者に対しメッセージを伝えて、この会は閉会した。

クマラ氏は、日本の恵まれた環境を活かすためにも、大学院への進学を勧めた。日本の世界的に見て低い大学院進学率をもったいないが、コロナ禍の間に経験を積んで来たる留学機会に対して備えるいいタイミングになったのでは、ということだ。

高城氏は自身の経験を元に、大学卒業後すぐに大学院進学や留学をするだけが進路選択ではないことを強調した。今は研鑽を積むことが、将来の留学がより意義深いものになるのでは、ということであった。

直前のアナウンスにも関わらず、総勢 39 名の参加者に恵まれた。終始、若者の発言者を見守る温かい雰囲気を感じられた、いい時間であった。

オンライン会議は、地域性の枠が大きく取り払われ、1 つの議題に対して長時間、さまざまな角度から話し合いが持てるのは大きな特徴だと実感できた。ここで得られた経験を、今後の大会につなげていきたい。

**注** (ウェブサイトの閲覧日は 2020 年 8 月 2 日)

- [1] ズーム社によるオンライン会議システム。参加者をグループに分けて同時進行で複数のグループが話し合いをできる「ブレイクアウトセッション」ができることが特徴。  
<https://zoom.us/jp-jp/meetings.html>
- [2] 本学会の常任理事である内田氏は、喜界島でのグローバル教育を推進している。以下は一例。  
内田富男. (2019). グローバル時代における離島の教育課題：喜界島の事例. 第 6 回九州大会一般発表.
- [3] Social Networking Service の略で、インターネットを介して人間関係を構築できる会員制サイトのこと。  
受付日 2020 年 8 月 3 日、受理日 2020 年 9 月 12 日